

---

# 引きこもりin天空の城

Acedia

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

引きこもりin天空の城

### 【Nコード】

N0349N

### 【作者名】

Acedia

### 【あらすじ】

決して天空の城ラピタとは何の関係もありません。パウモシ  
ーも出てきません。  
オタクだった高校生が異世界に転生して天空の城で引きこもる話です。

引きこもり嫌な方、作者に文才がなさ過ぎてあきれた方は戻るボタンをクリックしてください。

初投稿です、文才の無い作者ですが、よろしくお願いします

## 第0話

「ち、遅刻だぁぁ!!」

ね、寝すぎた。やばいいい。

重い鞆を肩に提げ、一生懸命、地下鉄に向かって走る。

「やばいやばい!」

時計を見れば8時10分。学校まで地下鉄で7分。校舎まで走って4分。間に合うか!?

地下鉄のホームに着いたが、まだ電車は着ていないようだ。

「早く来い早く来い早く来い早く来い早く来・・・」

願いが通じたのか分からないが、トンネルの奥からカンカンカン!と電車が近づいてくる音が聞こえた。その音を聞き、安堵の息をついた時、ドンツと、とても強い力で背中を押された。

「え!?!」

思わず手を前に出そうとするが、目の前には電車が通るための深い溝の中の線路しかないわけで、後ろを振り向こうと瞬間、カンカンカンカン!と、猛スピードで走る電車にぶつかった。そこで俺の意識はブラックアウトした・・・。

## 第0話（後書き）

こんな駄作を読んでくださって本当にありがとうございます。  
こうしたほうがいいよ、こうしたらどうか？なども受け付けます。  
後悔とか、反省とかいっぱいありますが、今後ともよろしく願います。

## 第0 / 1話

「知らない天井・・・いや空だったか。」

目を開けると目に入っただのは赤黒くて、禍々しい空だった。

「そついや俺、死んだのか・・・。」

誰が俺の背中を押したんだ・・・？俺は悪いこといっぱいしたに  
はしたけど、恨まれるようなことは一度もしていないぞ・・・？  
そう反芻しながら起き上がる。

「痛っ。」

手に何かとがったものが刺さったような感覚した。見てみると、  
ただの小石だった。

「どこだ・・・ここ・・・？」

あたりを見渡すと、前の向こうに河が見え、自分が座っていると  
ころは小石が敷き詰められていることから、河原だと推測した。し  
かし、それよりも・・・。

「何やってるんだ・・・？」

あたりを見渡している途中に不思議に思っただのは、5歳くらいの子  
供だったり、中年の、40代の大人の人などが石を必死に積んで  
いる様子だった。それも数人ではない、数十人、端から端まで河原  
沿いの向こう側にもぼんやりとだが、人が居る様子から、数百人は  
いるようだ。

「何かのイベント・・・？」

死後の世界にも遊びがあるんだなあと思っていると、河の向こう  
側から、ズン、ズン、と大きな足音が聞こえてきた。何だ・・・？  
と振り向く。振り向いた瞬間、息ができなくなつた。

それは、とても大きな牛の頭と頭の上に大きな角2本、胴体はた  
くましい男のだが、それも通常の人間のサイズではなくて、成人男

性の胴体を3つあわせたかのようなサイズ。下半身は馬のようで、手にはとても大きな、棍棒を持っていた。それがこっちに向かって歩いてくるものだから、心臓がどくどくと、あわただしく動いているようで、背筋からは冷や汗が噴出していた。

あと自分のところまで数歩、というところで、その牛鬼（仮）が一人の少年の前に立ち止まり、棍棒を振り上げた。

「《な、なにするんだ・・・？》」

振り上げ、勢いよく少年に向かって振り下ろす！

ブンッ！

ヒツと自分は牛鬼が棍棒を振り下ろした瞬間、目をつぶった。

グシャ！

「《や・・・やっちゃったのか・・・！？》」

恐る恐る、目を開いてみると、少年は無事で、牛鬼が棍棒を振り下ろしたところには、少年が積んだであろう石が崩されているところだった。

少年はそれを見て、とても泣きそうで、絶望しているような顔だった。牛鬼はソレをみて鼻を鳴らすと、河のほうに身を振り向かせた、が、いきなりこっちを見た。それも俺の顔を親の敵みたいな形相でにらんでいるのだ。

「・・・あ、・・・う。」

それがとても恐ろしく思えて、呼吸困難になったみたいに俺は口をパクパクさせていた。

ズン、ズン、と俺のほうに來ると、「オイ」とまるで牛の声と男の声を足したような声をかけられた。俺はどう返事したらいいのか、返事するべきなのか、そもそも俺に話しかけているのかわからなく

なつて、頭がクラクラしていた。

「オイ、オレガハナシカテイルンダ、コタエロ。」

そう牛鬼は言つと、成人男性の胴体くらいの大きさの腕で俺の首を勢いよくつかんだ。

「ヒツ。あ・・・が・・・。」

「ナンデイシヲツマナイ？」

牛鬼は俺をその場に勢いよく投げ飛ばした。

「ゲギツ!？」

のどからつぶれたような声がした。

「ハヤクイシヲツメ、テンゴクニキタイナラナ。」

天国に行きたいなら・・・？ここは天国じゃないのか・・・？

「こ、ここは、地獄なんですか・・・？」

俺は恐る恐る、口を開いた。

「ジゴク・・・？ブハ、ブハハハハハハ!!」

牛鬼は俺の言ったことが心底面白いといった風に豪快に笑った。

「ジゴク？コンナトコロガジゴク？ココトジゴクヲクラベタラ、テントチノサダ。」

「じゃ、じゃあ、ここはどこなんですか？」

「ココカ？ココハ、サイノカワラ、ダ。」

さいのかわら？さいの・・・賽の河原！？確か三途の川とは親より先に死んでしまった子が来るところで、親を悲しませたために、賽の河原で石を延々と積み続けなければならないという、あれか。

「う・・・そ・・・だ・・・。」

俺は自殺したわけでもないのに、殺されただけなのになんでこんなところにこなければならぬ!？

「サツサトイシヲツメ、マアツミオワルマエニ、オレガクスケドナア。」

ニタリ、と鬼は俺の絶望した顔が心底面白いといった風に口を歪ませた。

「俺は、殺されたんだ！なんでここにこなくてはいけない！？」

「コロサレタ・・・？マテ、オマエナハ？」

「赤月 賢悟」

「アカツキ、ケンゴ・・・？マテ・・・」

牛鬼は何かを考えるかのように、目を閉じた。

目を閉じて、勢いよく目を開き、にらみつけてきた。

「オマエ、ウソツイタ。」

え・・・？

「コロサレタダト・・・？オマエ、ジサツシタンジャナイカ。ウソツクヒマガアツタライシヲツメ。」

牛鬼は話が終わったというかのように、河のほうに体を向けた。

「ま、待ってくれ！本当に、本当に俺は殺されたんだ！」

俺は納得がいかず、牛鬼をとめようとする。瞬間、

バキッ！！

俺は頭に棍棒を受けた。死にそうな痛みなのに、不思議と意識ははつきりとしていた。

「オマエ、ウルサイ、ヤキイレルゾ。」

そう牛鬼は言い、今度こそ、河のほうに向かって歩き出した。

残された俺は座り込んで、なんでここにいるんだ、なんでなんだ、分からない、分からない、と、呟き続けた・・・。



## 第0、1話（後書き）

1日1話投稿していきたいと思っています

読み直して、さいの・・・三途の川！？というところがおかしいと感じたので、三途の川の部分を賽の河原にしました

## 第0'2話 石積みLife（前書き）

本当にごめんなさい。

1日1話投稿とかボクみたいな豚には無理でした  
投稿できる日はがんばって投稿します。

## 第0 / 2話 石積みLife

その日から俺の石積みLifeは始まった。

その日は不貞寝でもしようかと考えたのだけれど、全然眠くならない。先ほど石積みを崩され、再び石を積んでいる少年に聞いてみると、眠くもならないし、食欲もない、疲れるということはない、ということとは、あの牛鬼倒せるんじゃないのか？と聞いてみたが、少年によると、ここに居る人は常に石を積むだけしか出来ないような体力しか残っていないような状態になっているらしい。

この石積みはいつまでやればいいのか、と聞くと、自分の親が死ぬまでし続けなければならぬらしい。親が死ぬまでつて・・・俺の親まだ40代だ。病気や事故にならない限り、死ぬことはないだろう。そう少年に聞いていると、少年から、早く石積みを始めたい方がいい、あの鬼が来て、棍棒で死にそうになるくらいまで殴られちゃうよ。とありがたい忠告を得たけど、時すでに遅く、おれのまん前にあの牛鬼が居た。

俺はすぐさま逃げようと思ったけど、思った瞬間、鬼の棍棒で叩き飛ばされていた。それも一回じゃない。お前は反抗的だ。と言って、棍棒で何度も何度も叩きつけられる。この体は不思議なことに、死にそんな痛みを何度も受けているのに、骨が折れない、決して意識が飛ばない。死にもしない。数百回と叩かれただろうか、もう寝たい、このまま死にたいと考えているのに、この体は絶対壊れない、死にそうなのに、絶対に死なない。

俺が叩かれていて、何の反応もしなくなったのを見て満足したのだろう、牛鬼は河に戻っていった。ただ一言、俺にこう言って。

「イシツミヤラナ、マタキテナグル。」

俺はその言葉を聞いてバツと起き上がり、すぐさま石積みをはじめた。

単に石積み、と言ってもこの数でやらないといけないという数があるらしく、それは、100 - 自分が死んだ年齢＝石の数、らしい。

俺は15で死んだから、100 - 15＝85個積まなくてはならないらしい。85個って・・・多すぎる。崩されることに、毎回こんなに多くの石を積まなきゃいけないのか、と聞くと、毎回ではなくて、石積みをして、1年経つごとに、1個石を積まなくて良くなるらしい。1年って、どうやってわかるのかというと、自分の石積みが1年経つことに、「あ、1年石積みをやったなあ」と感覚的に分かるらしい。

マジで？と思ったが本当にマジらしい。まあ、やってれば分かる、と、石積みやって20年のおじさんが言っていた・・・。

さて、集中せねば。牛鬼たちには石積みをしつかりしているかしていないかを見ることが出来らしく、していないと、先ほどのようにボコボコにされるらしい。

そして石積みをしていて気づいたのだが、皆、石積みを河のほうに向かって行っている。なんでだ？と思い、ために河に背を向け、石積みをやっていると、後ろから棍棒で叩かれた。なんでも石積みをするときは背を河に向けて石積みをしてはならないらしい・・・。

「あ！1年来だな」

たしかにおっさんの言うとおり、石積みをしていたら感覚的に1年過ぎたということが分かった。

## 第0'2話 石積みLife（後書き）

結構賽の河原は独自解釈が入っております。これ全然賽の河原じゃないよ！って思ってもオブラートに包んだまま脳の片隅に置いておいてください・・・。

ネタバレになるんですが、第1話くらいまで主人公が最強になることはないです。

第1話まで後いくつだ、ですか？

さあ・・・分からないですねえ

あはははは・・・。

ヤメテ！！石を投げないで！

## 第0'3話（前書き）

今回は地の文と会話を話して書いてみました。

## 第0 / 3話

あれから20年の月日が経った・・・。

え？飛びすぎじゃないかって？20年何してたかって、石積んで、牛鬼さんに壊され、石積んで、牛鬼さんに壊されの無限ループだよ？あ、でもたまに牛鬼さんから気晴らしに暴こ・・・ゲフンゲフン。牛鬼さんたちって元々閻魔大王様の近くで働いていたらしいんだけど、職務怠慢とか、職務をまっとうできなかった牛鬼さんたちが、三途の川での監視の仕事をしよう命じられたらしいんだけど、こはとつても暇で、何にも娯楽がないから、20年前の俺みたいな生意気な死人をいたぶるのが唯一の楽しみらしい。で、俺はなんでか知らないが、いつも石積みを崩された後、叩かれました。時々、集団playとかありましたね、もうマジであの時は死ねない体を呪いました。牛鬼さん曰く、

「オマエミテルト、タタキタクナツテクル」

だそうです。それなんてイジメ？

まあ、そんなこんなで20年経って、今日もいつものように石積みを頑張っています。そろそろ石積みが終わりそうなので、牛鬼さん来るか「オイ。」来ちゃったよ。

「な、なんでしょうか？」

いつも石積みを崩されて、その後に暴こ・・・ゲフンゲフン、教育を受けさせられていたので、俺は失礼のないように、恐る恐る聞いてみます。



「オマエ、ジゾウボサツサマガオヨビダ。コイ。」

「え？」

「サツサトツイテコイ。」

突然のことで呆けている俺を尻目に、河の方に歩いていく牛鬼さん。これはついていけないといけないようですね、ついてかかないと今度は前回の集団 play よりもっと酷い事になると、本能的に悟りました。

地蔵菩薩様、ですか。確か賽の河原で石積みを頑張った子供に救済を与える神様でしたっけ。ということは……。

「極楽浄土行き！？ヤッホイ！！」

あまりの嬉しさにそう叫んだら、牛鬼さんに「ウルサイ」と拳骨を喰らいました。イテエ……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0349n/>

---

引きこもりin天空の城

2010年10月8日23時40分発行